藍野学院紀要，第 18 巻，2004，pp. 131 - 141

〔Activity Report〕

The present situation of the social environment and medical care of children in Mongolia

Takumi Ogata*

* Aino University

Abstrct

I first visited Mongolia in July, 2004 as a member of a volunteer organization.

We presented musical instruments to the Mongolian National Orphanage and also presented stationery to Merugeto elementary and junior high school.

Through visiting several medical facilities, we were able to gain an understanding of the effects of the living environment and lifestyle of the Mongolian people. It gave us an opportunity to reflect on how we can better conduct future social activities in the fields of health and education.

Key word : Mongolia, living environment, life style

〔視察報告〕

モンゴルの子どもたちの社会的環境と医療の現状

緒　方　　巧*

【要　旨】 筆者は社会活動としてのボランティア活動で，2004年7月にモンゴル国を初訪問した。モンゴル国立孤児院への楽器の贈呈と，メルゲト小・中学校への文房具の贈呈を行った。また，医療現場の見学を通し，生活環境や生活習慣がもたらすモンゴル人への影響を知り，今後の社会的活動のあり方をはじめ，健康，教育について再考する機会となった。

キーワード：モンゴル，生活環境，生活習慣

はじめに

筆者は，2004年7月21日から5日間の日程でモンゴル国を訪問した。訪問の目的の1点目は，社会活動として実践している高槻市のボランティア団体「モンゴル国と交流をすすめる会」の会長として，ウランバートル市にある「モンゴル国立孤児院」へ楽器を贈呈すること，ウルブハンガイ県にある「メルゲト小・中学校」へ文房具を贈呈することである。会員も含め13名と同行した。2点目は，モンゴルの遊牧民のゲル，エネデル歯科専門病院，国立第一病院などを見学することで，モンゴルの風土・食生活などの生活環境や生活習慣や医療の実態がもたらすモンゴル人への影響を知り，今後の授業・研究に生かしていくことである。

筆者は今まで，アメリカ，カナダ，ドイツ，デンマークの医療・福祉・教育・生活の場を実際に見学・体験した。世界各国の様々な情報や知識がインターネットによって即座に入手可能な時代になったが，専門職としての視野を広げ人間理解を深める上で，実際に現地に行って現場を体験する意義は大きい。

今回の短期間の滞在で得たモンゴルに関する知見は，針の一穴から見たに等しいが，今後の社会的活動のあり方をはじめ健康，教育について再考する機会となった。本稿では，今回の学外研修で得た内容と，今夏参加した日本教育学会での国際公開講座におけるモンゴル教育省付属教育研究所所長，ベグズ・ナドミド氏の講演内容も加えて報告する。

I　モンゴル国の概要

モンゴル国（以下，モンゴル）は中央アジアの東部に位置し，外務省の2002年統計年鑑[1]によると国土面積は156万4,100 km^{2}で，日本の約4倍である。人口は247万5,400人で1 km^{2}あたりの人口密度は1.58人となっている。15歳未満の人口が32.6%と若者の国である。人種は全人口の95%をハルハ・モンゴル人が占めている。モンゴルは，草原が国土の約80%を占めていることから，「草原の国」として形容されており，年間降水量が少ない。その中で人口の53%

* 藍野大学

が都市生活を，47% が遊牧生活を送っている。言語はモンゴル語で，外国語としてはロシア語，英語が使われている。13 世紀にチンギス・ハンが大帝国を築き繁栄した後，中国に支配されたが，1924 年にソ連の援助を受けモンゴル人民共和国として独立した。国旗の制定は 1949 年だが，1990 年に社会主義体制から脱して民主化し，1992 年に新憲法のもとで「モンゴル国」となった。現在の元首は，2001 年 6 月に再任されたナツァギーン・バガバンディ大統領である。国旗は赤と青で配色されているが，赤は勝利と歓喜の色，青は不変の大陸を表す。左側の赤地には，民族のシンボル「ソヨンボ」が黄色く書かれている。ソヨンボの炎は過去・現在・未来，太陽は民族の母，月は民族の父，槍と矢じりは敵の制圧，巴形をした 2 匹の魚は警戒心，左右の長い長方形は国民の団結力を示している。

首都はウランバートルで「赤い英雄」という意味を持つ。日本人がモンゴルへ入国するためには査証が必要である。日本との時差は 1 時間だが，4 月から 9 月までは夏時間で時差がない。気候は内陸型の乾燥した気候で四季がある。短い夏の平均気温は 17℃ だが 40℃ 近くになる日もあるという。一方，冬はマイナス 40℃ を下回ったりするため，雪害による家畜の大量凍死が経済的に深刻な問題となる。モンゴルの普通貨幣にはトゥグルグで，紙幣は 50，100，500，1,000，5,000，10,000 トゥグルクがあり，硬貨には 20，50，100，200 トゥグルクがある。日本人が現地で買い物をする場合，米ドルを使用することが多い。

II　社会活動としての「モンゴル国と交流をすすめる会」の活動経緯

1．発足の経緯と活動目的

本会が，モンゴルをボランティア活動の対象国としたベースには，会の発起人である顧問の竹本久雄夫妻によるボランティア活動がある。中国の竹笛奏者，張雷（チャンレイ）氏のチャリティーコンサートを開催した際の収益金を，張雷氏の希望によりモンゴル国のストリート・チルドレンの救済のために寄付したことがきっかけになった。以後，モンゴルの厳しい経済状態下で育っている子ども達，特に国立孤児院の子ども達の状況を知ることで，モンゴルとの交流・支援の必要性を感じた竹本夫妻によって会の発足が実現した。

大阪府高槻市のボランティア団体「モンゴル国と交流をすすめる会」（以下，本会）は，2001 年 3 月 17 日に発足式を行った。役員は，会長 1 名，副会長 2 名，事務局 1 名，会計 1 名，監事 1 名，理事 2 名，顧問 2 名で，会員 59 名でスタートした。発足式には，在大阪モンゴル国名誉総領事の佐藤紀子氏がモンゴルの衣装を着て出席し，本会の活動に期待を寄せた。筆者は会長の任を拝したが，モンゴルに関する充分な知識も本格的なボランティア活動の経験もない中，不安と覚悟が入り混じったスタートとなった。

本会の活動目的は，「高槻市とモンゴル各都市との住民間の交流を促進し，相互の信頼関係の樹立と，これに基づくモンゴルへの各種の支援活動を行う」ことである。

2．事業と運営

主な事業は，1）大統領夫人が主宰する「人間のための基金」への支援，2）学校や病院の建設に関する支援，3）マンホール・チルドレンへの物資による支援，4）両国の音楽による交流事業，5）両国民の人的交流事業（特に子ども達の交流），6）その他，両国に有益な交流事業の 6 項目である。本会の運営は年間 3,000 円の会費と寄付金・その他の収入（フリーマーケット開催による収益など）を充てている。この 3 年間は，特に事業の 2），4），5），6）について具体的な活動をしてきた。

3．活動内容

本会は，月 1 回の役員会，年 1 回の会報発行と総会を行っている。

1）2001 年度の活動

初の活動は，2001 年 5 月 23 日モンゴル国立孤児院の子ども達の代表 22 名とドゥグレ孤児院院長を含む 5 名の教師を高槻市に迎えたことである。11 歳 1 名，12 歳 1 名，13 歳 2 名，14 歳 12 名，15 歳 4 名，16 名 1 名，17 歳 1 名，合計 22 名の子どもと教師が 2 人 1 組になって，14 組のホストファミリーのもとで 2 泊 3 日のホームステイをした。我が家にも 14 歳と 15 歳の男の子が宿泊した。彼らは二段ベッドを珍しがり喜んだ。滞在中は，高槻市市長を表敬訪問し，また高槻森林観光センターで焼肉のウェルカムパーティーと温泉浴を行った。また高槻 YMCA の室内プールで水泳体験も実施した。水に入ることがめったにないというモンゴルの子ども達は，温泉もプールも歓声を上げて大喜びした。明治製菓工場などを見学した後，高槻市生涯学習センター多目的ホールで子ども達による吹奏楽，馬頭琴，民族舞踊の公演会を開催した。入場料 999 円にプラスして，タオル 1 枚，石鹸 1 個，鉛筆 1

本の支援を呼びかけたところ，320名の来場者から期待以上の支援が得られた。子ども達の演奏と踊りにも，「感動した」との声が多く寄せられた。

8月に第1回目のモンゴル訪問を実施した。参加者11名はグリーンロードづくりに参加し，他のボランティア団体と協力して植樹活動を行った。9月27日には，私立メルゲト小学校の児童23名，教師1名を高槻市に迎え，12組のホストファミリーのもとにホームステイした。子ども達は2年生から日本語を学んでいるので会話ができた。我が家にも5年生の女の子が2人宿泊し，長女の浴衣を着たりピアノを弾いたりして楽しんだ。長女の通う高槻市立竹ノ内小学校の校長先生をはじめ，担任の先生が受け入れに協力して下さったので，5年生の習字の授業と給食に参加して日本の子ども達と交流を図ることができた。市営プールで水泳体験をさせた際は，飽きることなく，水を堪能していた。彼らの滞在は短いものであったが，それぞれのホストファミリーは工夫を凝らし彼らを歓迎した。

2）2002年度の活動

2002年は，わが国とモンゴルとの国交が樹立して30周年という意義深き年であった。その1月に，モンゴルの障害者の義足作成を支援するためのチャリティーコンサートを開催した。1993年に，東京で行われた世界子ども音楽会にモンゴル代表で出場し，グランプリを獲得したオトゴンフー・ソロンゴさんが，ピアノ演奏による歌で70名の来場者を感動させた。彼女は1994年から，障害者の子どもや雪害を蒙った遊牧民救済のためのチャリティーコンサートを積み重ねている。本会のチャリティーコンサートで得た収益金によって，19歳の女性の義足作成を実現することができた。

8月に第2回目のモンゴル訪問を実施し，参加者が首都のウランバートル市内にある国立孤児院とウランバートルから約350 km（車で約7時間）のウルブハンガイ県にあるメルゲト小学校を訪問した。高槻市夏祭りでは交流基金のためのフリーマーケットを2日間開催した。同時に，国立孤児院へ楽器を贈呈するため，その収集活動を開始した。

3）2003年度の活動

5月17日，国際環境サミット出席のために来日した，モンゴルインフラ省（開発担当）のジクジット大臣と本会役員の懇談会を大阪国際サイエンスクラブで開催した。大臣側よりモンゴルの経済，環境等の話があり，その後，本会の活動を報告し，モンゴル支援のための情報収集や意見交換を行った。大臣の帰国時には，本会の顧問である東和会理事長より，医療用の手術用手袋とマスクなどが贈呈された。

8月の高槻市夏祭りで，（財）都市交流協会イベントブースの一部を借りて2回目のフリーマーケットを開催した。

11月28日には，モンゴル国立馬頭琴交響楽団の高槻公演会を開催した。モンゴル国立馬頭琴交響楽団は，モンゴルの民族楽器である馬頭琴を中心に構成され，高槻公演では指揮者のツェンディーン・バトチョロン氏を含めた35名の楽団員を受け入れた。同楽団は1993年に誕生し，1997年からは毎年日本公演を行ってきた。2003年には，国連教育科学文化機関（ユネスコ）の世界無形遺産に選ばれた。佐藤紀子氏が司会を務め，楽団がニューヨークのカーネギーホールやモスクワのボリショイ劇場など世界各地で公演を行い，好評を博してきたことを紹介した。高槻公演では，モンゴル長唄やホーミーなどを含め16曲を演奏し，550名の来場者に行ったアンケートには「感動した」，「モンゴルへ行きたい」などの声が寄せられた。入場料3,500円の収益金は，全て演奏会の運営費と楽団の発展のために寄付した。

4）2004年度の活動

7月に第3回目のモンゴル訪問を実施し，国立孤児院へ楽器を贈呈した。持参した楽器はトロンボーン4，トランペット3，ギター8，フルート3，リコーダー1，ハーモニカ1，木琴1，メトロノーム1である。楽器以外に，Tシャツ，携帯用ラジオを贈呈した。メルゲト小・中学校へは文房具の贈呈を行った。

11月に3回目のフリーマーケットを開催し，12月に会員相互の親睦会を開催した。

Ⅲ　今夏の訪問の概要

今夏のモンゴル訪問は，本会として3回目であった。しかし，仕事の都合などで参加の機会を逸してきた筆者にとっては初訪問であった。日程は表1に示した。

1．モンゴル国立孤児院と子ども達

モンゴル国立孤児院の設立目的は，「国の発展のために活躍する優秀な子どもを育てること」である。20名の教師が勤務している。ドゥグレ院長の話によると，両親を病気や事故などで亡くしたり親に捨てられた子どもは，ウランバートル市にある住民台帳をもとに把握され，その中から選ばれた子どもが国立孤児院で生

表1　モンゴル国訪問の日程

7月21日（水）	関西国際空港から韓国インチョン（仁川）空港経由でモンゴル国入国
22日（木）	孤児院訪問（楽器の贈呈） エネデル歯科専門病院の見学，テレルジへ移動
23日（金）	テレルジでメルゲト小・中学校の生徒と交流・文具の贈呈
24日（土）	牧民のゲル訪問，ウランバートル市内へ移動，国立第1病院見学 モンゴル国立馬頭琴交響楽団〔2003年国連教育科学文化機関（ユネスコ）の世界無形遺産になる〕の団員と再会・交流
25日（日）	ウランバートル・ボヤントオハー国際空港から，韓国インチョン（仁川）空港を経由し関西国際空港着

図1　国立孤児院の子ども達

活している（図1）。幼稚園は1974年に創立されたが，建物は1979年に建築され，1991年に幼稚園と学校を合併してモンゴル国立孤児院となった。開院当時は，子ども達の80%ぐらいが貧困による様々な病気を持っていたため，それらの治療が中心の段階にあったという。モンゴルは，雪害など気候からの被害が大きい。そのため，政府が孤児院に出すべき予算の6～9千万トゥグルクを，半分くらいに削られることが多いとのことであった。26年前に立てられた建物は一度も修理されておらず，暖房や台所の機械設備，バス・トイレなどが老朽化したままになっている。今回，筆者はトイレに入ったが洋式便器は傾き，清潔も保たれておらず，便座に座れる状況ではなかった。紙や水が充分でないモンゴルの生活環境と，子どもの収容人員が多いことが要因と考えられる。

幼稚園には3～8歳の子ども達120人，寮には8歳～18歳の子ども達120人が4人部屋で生活している。約140名が小学校から高校に通っており，毎年，5名～10名の子ども達が中学校と高校を卒業している。卒業生の進路は多様であり，記者，公務員，演奏家，舞踏家，ビジネスマンなどになっている。めずらしいところでは，1997年には7名がアマルバヤスガル寺のラマ（僧侶）になり，1998年に10名がウランバートル市にある大学や専門学校に入学，2000年に10名がロシアのケメロワ市にあるラジオ電子専門学校に留学した，とのことだった。

孤児院では，音楽の好きな子ども達が集まって，それぞれの楽器ごとに練習をしている。たとえば吹奏楽部18名，馬頭琴9名，ダンス12名などである。今夏の訪問時も吹奏楽部がモンゴルの歌を演奏し，ダンスのメンバーが民族舞踊を披露してくれた。このメンバーは，モンゴル国内では10県，約50の村，外国ではソ連，韓国で演奏を行っている。彼らは，国内で行われる音楽祭やコンテストには何回も参加し，グランプリをとるほどの活躍をしている。しかし，3年前，高槻市の演奏会では，時に楽器の損傷が目についた。また，子どもの数に対して楽器が不足していることもわかった。そのため本会は，2年前から楽器を収集する活動を開始した。楽器は個人の愛用品であり高価なものが多いため，収集には時間と労力を要した。しかし，この2年間の広報活動によって，色々な方から楽器の提供を受けることができた。

孤児院の子ども達は，毎年6月から始まる長い夏休みに入ると，孤児院から13 km離れた郊外へ出かけ，1年間の食料にあてるために家畜の世話をして乳製品などを得る。10ヘクタールの耕作地では果物や野菜を収穫している。授業でもパンや色々な菓子，椅子や机，ドアなどの家具を作っている。今夏も，演奏などで出迎えてくれた以外の子ども達は，郊外の耕作地へ移り住み，自炊をしながら働いているとのことだった。

孤児院は，モンゴルの大統領をはじめ，首相，イギリスのアンナ王女，カザフスタンのサラ・ナザラバワ大統領夫人など，国内外から多数の訪問者を受けていた。今回，ダンスを披露してくれた男の子たちには，アメリカ人のスポンサーがついたのでアメリカへ留学すると言っていた。男の子たちは，「できれば日本へ行きたかった」と言って泣いたという。経済力がない彼らには意思決定の権利もないのだろうか。孤児の悲しみが伝わり不憫であったが，幸せと成長を祈ることしかできなかった。

踊った子ども達を抱きしめた時に，ふっくらとした民族衣装の中の痩せた身体が手に伝わってきた。栄養状態は決して充分でないに違いない。子ども達は18歳まで，甘えたい幼児期や複雑な思春期もここで過ごし，生活の保障を受けながら集団生活をして育つ。院長や教師たちの優しい笑顔が印象的だったが，生活全般にわたる世話や心のケアも担っているだろう教師たちの苦労が偲ばれた。

2．モンゴルの教育とメルゲト小学校の生徒達

ベグズ・ナドミド氏の話によると，モンゴルの義務教育（小・中学校）は8年間で，高校は2年間である。小学校への入学年齢は7歳で，それから4年間が小学生，5年生から8年生までの4年間が中学生である。9年生・10年生の高校への就学率は22%程度である。小学校から高校までは同じ校舎で学ぶ。大学は5年制で，高校・大学の他に2～4年制の専門学校もある。大学では28%の人が学んでいる。モンゴルの都市では3歳から幼稚園などの就学前教育を受ける機会があるが，人口の約40%を占める遊牧民の場合はその機会がない。小学校への入学も，田舎では家の手伝いをさせる都合上，9歳から通わせる家もあるという。しかし，遊牧民の90%以上は義務教育を受けている。

学校は9月1日から6月までを4学期で区分している。9月1日～11月上旬が1学期，11月中旬から12月下旬までが2学期，2週間の冬休みの後，1月上旬から3月下旬までが3学期で1週間の春休みの後，4月1日から5月下旬までが4学期となる。その後，8月31日までの長い夏休みに入る。遊牧民の子どもは学校の寄宿舎に入って生活する。高学年になると自分で馬を育てられるようになるので，馬に乗って通学する子も多くなるとのこと。遊牧民の子どものために小規模校の設置，スクールバス，テレビ放送教育，教師の巡回などが推し進められている。ベグズ・ナドミド氏によると，「モンゴルは90年代以降，教育法を4回改正しているが，2005年度からは現在の10年制から，11年制（小学校5年間，中学校4年間，高校2年間）をスタートさせる」とのことだ。小・中学校では32人学級を目指し都市部の中学校ではコンピューター教育も行われる。中学校の外国語教育では，英語，ドイツ語，フランス語，日本語などを教えるところもある。このように教育のあらゆる段階で語学教育の時間を増やし，情報通信教育も小学校から行なうなど，教育に力を入れている。

メルゲト小学校は，ウルブハンガイ県にある1998年に創立された学校である。ウルブハンガイ県にはもともと小学校が4校あったが，2001年にそのうちの1校がメルゲト小学校と合併した。2002年の夏には，本会のメンバーがメルゲト小学校を訪問したが，今夏は教師1名と18名の子ども達（2年生1名，6年生1名，7年生2名，8年生14名）が車で8時間かけてテレルジにあるゲルのキャンプ地に来てくれた。本会から文房具として，地球儀と筆記具などを贈呈した（図2）。

図2　メルゲド小・中学校の子ども達に文房具の贈呈

日本語クラスの子ども達による説明では，メルゲト小学校の学習科目のうちモンゴル語と英語は必須で，日本語とロシア語は選択科目である。音楽は5年生で終了する。7年生になるとコンピューター教育がスタートし，生徒達はパソコンを操作できるようになる。その他の科目は，文学，歴史，数学，体育，物理，化学，幾何学などで，現在の教師数は1年生から8年生まで25人である。

同校のカリキュラムに日本語が選択科目として組まれたのは1998年で，2年生からスタートした。日本語はモンゴル人教師が教えている。5年生からは全員に英語教育がスタートし，アメリカ人教師が1人いるとのこと。2001年の合併時に他校から来た5年生は，すでに3年間日本語を学んできたメルゲト小学校の生徒とレベルが揃わないため，ロシア語を選択している。2001年に本会が受け入れをした時に5年生だった生徒は今夏8年生になっており，6年間に亘る日本語履修によってかなりの会話力を身につけていた。ホームステイした2人から，時々届く手紙の文面には日本語の漢字が増え，英語学習にも熱心に取り組んでいる様子が綴られているので，我が家の子ども達も圧倒されている。

同校では1～8年生までは2クラスで，9・10年生からは1クラスになる。1クラスは約30名である。4年生になると試験があり，8年生まで算数の強化クラスと日本語・英語などの外国語の強化クラスに分けられる。ちなみに現在の8年生のクラスは，算数強化クラスが男子生徒20名，女子生徒14名，外国語強化クラスが男子生徒8名，女子生徒28名で構成されているそうだ。今回の交流時，ゲルの中は自然にゲームとおしゃべりの2チームに分かれた。モンゴルの玩具「シャガー（ヒツジの足関節の骨で1頭から2個とれる。ゲーム時は骨を4個持って1人分になる）」で遊ぶグループは，主に算数クラスの生徒だった。シャ

ガーは，日本の遊びで言うとメンコ，ビー玉，おはじきに相当するモンゴルのゲームといわれている。ゲーム時，シャガーの四面にはそれぞれ名称があり，ラクダ・羊・馬・山羊と呼ぶ。子ども達のほとんどがシャガーを持っていて，筆者にも羊の毛で作ったフェルトの可愛い小物入れに入れてプレゼントしてくれた。しかし，シャガーでうまく遊べない筆者は，日本語クラスの生徒達に囲まれ，話が弾んだ。生徒達は日本語で話すのが嬉しくて仕方ない様子で，夜遅くまで一緒に語り合った。日本語を選択学習している生徒達の夢は，朝青龍や旭鷲山が実施している留学支援制度を受けて日本に留学し，国際的に活躍することだという。しかし，留学支援を受けるためには日本語の学力試験に合格しなければならない。そのため生徒達は，「絶対に合格したい！してみせる！」と闘志満々で，決意を語る瞳には夢の実現に向けた意欲と輝きが感じられた。

3．エネデル歯科医院の見学と歯の健康に関するモンゴルの課題

エネデル歯科専門医院は2003年に開院し11名の歯科医が勤務している（図3）。開業時間は8時30分～21時。病院建設にあたっては本会の会員も寄付した。

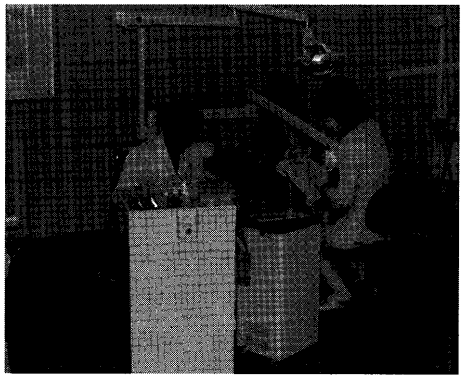

図3　エネデル歯科専門病院

佐藤紀子氏の説明によると，毎年夏に集団検診を行い，冬に結果をまとめ，報告している。モンゴル人の生活の場を大別すると，都市生活者，家畜を遊牧させながら住居（ゲル）を移動させていく遊牧民，草原の一箇所に住居を固定して生活する牧民がいる。遊牧民と牧民のゲルは日本の離島のようなものであり，草原を四輪駆動車で回る。毎年9月になるとモンゴルの21県から歯科医が集まり，3～4日間の研修を行っているが，現在はこの専門病院の研修室で研修会を実施しているとのことだ。

夏には，日本からボランティアの歯科衛生士，看護師，ソーシャルワーカーも応援に来る。歯科医を育成するため，岡山大学歯学部にも留学生が派遣されている。治療に関する事例検討は，歯科医同士でインターネットで写真を提供しあい，日本の歯科医とも意見交換をしている。歯科衛生士の資格を持つ佐藤紀子氏は，モンゴルにおける10年前の歯の治療状況について，「歯の治療に必要な材料も充分でなく消毒薬も麻酔薬もなかったので，抜歯するか，我慢するしかなかった」と説明した。そのため，モンゴルでは特に子どもの虫歯予防に力を入れてきたが，歯ブラシも大きなサイズのものしかなく年齢に合ったサイズがなかった。そこで，色々と手を尽くした結果，大阪府八尾市で歯ブラシ製造機を入手することができ，ようやく病院内での歯ブラシ製造が可能になった（図4）。その他の色々な機器や資材も中国からゴビ砂漠を越えて運んだ，と佐藤氏はその苦労を語った。経済状況が厳しいモンゴルでは，建築も日本と違って一度に最新設備を完備した施設をつくることは困難で，一つひとつ何年もかけて整備していく現状にあるようだ。この病院では，国立孤児院の子どもを無料で治療している。子どもの診療時は，歯科医が子どもの頭を膝に抱いて治療をしている。また，待合室には子どもの絵本が置いてあり親が読み聞かせをしていた。

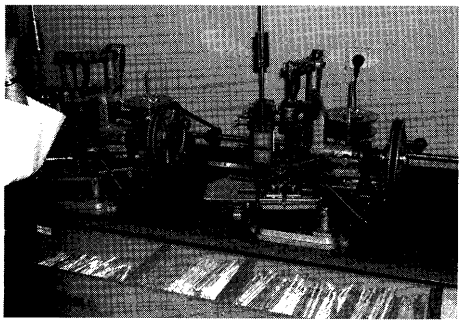

図4　歯ブラシ製造機

感染症対策として，口腔内の唾液や血液の吸引に使用した物品は，使用ごとに滅菌・消毒している。オートクレーブのある部屋は，清潔物品と不潔物品が別々に取り扱われるように，受け渡しの窓口が分けられていた。見学の際も見学者には靴にかぶせるビニールのシューズカバーが配られた。

モンゴル人の歯の健康に影響しているのが食生活の変化である。コカコーラの工場ができてコーラを飲む機会が増えたことや，口当たりのいい甘いお菓子が氾濫するようになって，子ども達が自家製の硬いチーズやヨーグルトよりも甘いお菓子を好んで食べることが虫歯の原因になっているという。佐藤紀子氏は，「日本でいりこをかじらなくなったのと似ている」と嘆いていた。

倉敷医療生協副理事長・同歯科群本部長の石原[2]は，モンゴル歯科協同組合への援助のあり方として，「現在のモンゴルの歯科疾患の実態は，戦後の日本で砂糖の消費量の急激な上昇が起こり，それに対応すべき公衆衛生や予防知識の遅れの中で，小児の重症う蝕が蔓延した状況に急速に接近しています。しかも経済的貧困と歯科治療の公的保障制度の遅れ，および歯科医療従事者の圧倒的不足という事態は，かつての日本の口腔内の破壊テンポと比べても，桁違いのスピードで進行する危険性があります。」と指摘している。モンゴルでは，子どもの虫歯の増加に歯科医療の発展が対応できるかどうか，が課題である。

4．モンゴル国立第一病院の見学とモンゴル医療の課題

モンゴル国立第一病院のレントゲン室，一般病室，救急外来の病室，ICUを見学した。デジタルカメラやビデオによる撮影は許可されたが，希望していた日本語通訳の担当者が急遽変更になったり，見学時間と場所に制限を受けたため，期待する具体的な情報が得られなかった。一般病室は3人部屋でやや狭い感じを受けた。ベッドは低く電動式ではなかった。リネンは柄物でそれぞれ違っており，病室には洗面台が一台あり，カーテンはなかった。ICUには人工呼吸器など医療機器に管理されて輸血を受けている患者がいた。看護師は3人おり，ユニフォームのカラーが違っていたので，意味があるのかと聞くと，特に意味はなく色々な種類があるのだ，と言っていた。病院の照明は全体的に暗かったが，看護師の雰囲気は明るく友好的だった。

モンゴル人の平均寿命を2002年の保健統計[3]でみると，男性は64歳，女性は67歳となっている。合計特殊出生率2.4，乳児死亡率は1980年が97人，2002年が58人である。主な死因順は，循環器系疾患，悪性新生物，消化器系疾患，感染症・寄生虫疾患，呼吸器系疾患となっている。モンゴルでは国立病院が老朽化し，医療機器の不足と旧式品が多いために，旅行者が安心して医療を受けられる状況ではない。外務省はインターネット上でも渡航者に対し，病院への受診を控えるように指摘している。今回の滞在中，参加者の1人がホテルやゲルの水をうっかりして飲んだために，ひどい嘔吐・下痢に苦しめられたが，病院を受診することを躊躇し安静と水分補給で対応した。

特定医療法人徳州会の徳田虎雄理事長によって派遣された，モンゴルの医療状況視察団[4]は，国立第3病院を視察した時の印象を「日本の30年前の姿を見る思いがした」と述べている。報告では，「現在モンゴルの医師の月収は約120ドルで，自分のクリニックを持つ医師はそちらに向かい，それ以外の医師はアルバイトで，モンゴルの平均月収の300ドルをなんとか維持している」と述べている。今回，筆者の見学を案内してくれた医師の車は，フロントガラスに数箇所ひびが入り走行するのに運転席からの視界が悪かった。「なぜこんな車に乗っているのか」と聞くと，「お金がない」とのことであった。

先に述べたモンゴルの医療状況視察団[4]によると，「病院には176名の医師が在籍していますが，そのうちの64名は日本の仕組みにはない教育課程で医師と称したものです」，「院長に訊ねても，正確な職制ごとの職員の実数が把握できていません。また64名の医師は，予備医師と呼ばれて勤務年数で決まるそうです」など，医師のレベルも問題である，と報告している。

吉野[5]は，「モンゴル看護師協会の活動強化に関する支援事業への取り組み」と題して，2003年のモンゴル視察の内容を報告している。その中で，モンゴルの看護制度と看護職のおかれた状況，モンゴルの看護教育とその課題などに触れ，特に医療設備の不備と医療従事者の人材不足を述べている。「医師・看護師の免許は更新制になっているが，時間的，財政的な制約で継続教育を受講できないため，看護師総数が減少し，医療現場が恒常的な人材不足に陥っている。看護教育の場でも，1冊12米セント（約15円）の教科書を購入できる学生が少なく，卒後，遠隔地域に勤務した場合，継続教育を受ける機会も皆無に等しく，自己学習による能力開発は極めて困難である」と報告している。

そして「年一度，専門家の短期派遣や看護リーダーの招聘をして研修機会を提供する」など，今後の看護師支援の計画を紹介している。

モンゴルの医療状況視察団[4]の報告にも，「モンゴルの医療を日本並みにするには，大きな手直しが必要である。しかし翻って考えてみれば，かつて日本にもこうした時代があった。今の最先端医療を最初からそのまま運ぶだけではなく，モンゴルの国情に合わせた医療も必要だ。つまり，建物や医師，看護師のレベルをできるところから徐々に引き上げながら，最先端医療機器や教育を提供していくところから始めるべき」と述べている。

5．モンゴル人の食生活の変化と牧民の生活環境

モンゴル人は主に冬は赤い食べ物（肉），夏は白い食べ物（乳製品）を食べる。気温がマイナス40℃～50℃にも及ぶ寒い冬は，肉食を1日に2回摂ることで熱量を得ている。夏は自家製のチーズ・ヨーグルト・馬乳酒をつくる。馬乳酒は，アルコール度1～2％でビタミンCが多く，ドロッとしていて酸味がある。家によって味が違うようだが，肉食で疲れた胃腸を馬乳酒で整えるという。

しかし，モンゴルも国際化が進み，遊牧民の中にも日本やアメリカ，韓国など，海外へ行く人が増えた。外国文化に触れることで，健康な食生活に関する情報を得，多様な食品を入手することも可能になった。例えば，羊などの肉食の過剰摂取がよくないということから，ピーマン，白菜，大根などの野菜も作り，鶏肉や魚も積極的に摂る生活へと生活スタイルが変わってきている。その反面，辛い食べ物も食べるようになり，子どもが自家製の乳製品よりも甘い菓子類を好むようになったことで，虫歯が増加するなどの問題が出てきている。今後，モンゴル人の疾病構造が変化していくことが考えられる。

今回，ウランバートルから東北東へ約70 kmの所にあるテレルジで，牧民のゲルを訪問する機会を得た。ゲルは，モンゴル遊牧民・牧民の住居である。ゲルは丸くて白い住居で，緑の草原に点在し，青い空と緑の草原の中でひときわ白さが引き立つ。ゲルは，遊牧する際に移動が容易なように短時間で解体・組み立てができるようになっている。ゲルの壁は木の骨組みと羊毛から作ったフェルトの覆いでできており，屋根は低く頂点は天窓になっていて煙突があり空からの光も差し込む。内側の壁（内装）は，ゲルによって様々な柄の布で覆われている。壁には動物の毛皮や飾り物が下がっていたりする。入り口は強い北西風を避けるために南東方向につくられている。ゲルを入った右側が女性の座で，たんすや台所用品が置いてある。左が男性の座である。中央にストーブがあり煙突につながっている。ストーブの横にテーブルがあり，ゲルの奥に仏壇や写真が置かれている。ワンルームのゲルに生活必需品の全てがある。見渡しても無駄なものが無いどころか，何をもって必需品と言うのかさえ考えさせられるほど物がない。一方，日本では家族の個室化が，家族の孤立化や引きこもりなどの問題とも関係するため，ワンルームのゲルに家の持つ意味や利点を考えさせられた。

遊牧民は四季ごとに移動生活をするが，牧民（定住者）のゲルの中には周囲を柵で囲っているところもある。広い草原に家畜を放牧している。現在モンゴルでは，牧民の土地を法律によって私有化しようとしている段階にあるとのこと。草原には道が一本続いていて，車は時折通る程度なので，ウシやウマも平気で道路を歩いている。道路は舗装してあるところもあるが，いたるところに穴が開いていて車はそれを避けて走るので，本会の1人はジグザグ運転に車酔いしてしまった。牧民の子ども達が道沿いで物を売ったりしている。

草原では，移動中もトイレがないので自分で場所を確保して排泄し，手はペットボトルの水で洗う。夏の草原はエーデルワイスやハーブが咲いて花のじゅうたん状を呈しているが，馬糞もいたるところに落ちている。馬糞が臭くないのは馬がハーブを食べているからだそうだ。食から排泄までが環境と一体化して無駄なく循環している。牧民達は友好的で，自分のゲルに案内してチーズや馬乳酒をご馳走してくれた。筆者をはじめ常に，下痢にならないように気をつけて行動している参加者たちに，馬乳酒をぐいぐいと飲む人はいなかったが，同行した通訳のモンゴル人は一気飲みをしていた。草原のゲルでは，夜になると冷え込むので一晩中ストーブを焚く。家畜の糞などを燃やして暖をとる。ゲルを一歩外に出ると真っ暗で，地は草原，空は満天の星だけになる。五種の家畜（ウマ，ヒツジ，ラクダ，ウシ，ヤギ）と草原を財産にして自然とともに生きている人々と触れていると，牧民は人間が生きるのに最低限の物しか持っていない超一流のシンプル生活者だと感心する。大阪の喧騒の中で時間を追い時間に追われて生活している筆者は，草原と空の間で暮らす牧民のゆったりとした動きと暖かく人なつっこい笑顔に触れ，穏やかな気持ちと時間の流れを実感した。

ベグズ・ナドミド氏によると，モンゴル人は，遊牧

文化を維持してきた人たち・都市生活をしている人たち・地方から都市へと移り住んでいる人たちに分けられる。都市生活者と遊牧民では，食生活・服装・住居などの生活スタイルに大きな違いがある。世界では自然環境の悪化が見られるが，モンゴルの遊牧民の場合も降水量の減少で川が枯れるなど生活に困難な状況を呈している。モンゴルの四季は気温差が激しいために，家畜への被害が甚大である。2002年～2003年の間に家畜の3割が死んでいる。一番の財産である家畜が被害を受けることで遊牧民の貧困が進み，かれらの都市への移住も見られる。こうした移住によって，遊牧民の文化が失われていく現象が見られる。

しかし，ベグズ・ナドミド氏は遊牧民は自然とのかかわりが深い分，モンゴル人は優しくて爽やかな人が多いという。人口が少ない分，他者の生命を大切に思う。モンゴルには，「人の命は金」という言葉がある。人々は，時計で1日・1年を見るのではなく，四季と，朝，昼，夕という時間の流れの中で生活している。何かを準備するときも，自然の都合で約束どおりに行かないことがある。したがって，馬に乗りながら常にこれからどうするかを考え，対応して生きている。モンゴルの草原は，広大な故に一軒一軒が離れているが，家畜の育て方も違うので家畜の管理上からも離れて住むことを好む。家畜は生きている工場のようなものである。遊牧民が最も努力していることは，家畜をいかに良い方法で良い状態にしていくかであり，そのために家畜の世話に関する技能を尽くしている。遊牧生活は自然災害から逃げ回る生活ともいえる。遊牧民の心理を理解する一つとして，彼らは「乗り越えるのではなく避ける生き方をする」と述べていた。

遊牧民の最近の15年間の変化として，一世帯あたりの家畜数の減少と機械化があげられる。2000年の段階では自動車の半分が個人の所有であったが，2002年では個人所有が72.0%に増加している。遊牧民の28.9%がソーラーエネルギーなどの発電を使うようになり，33.2%がテレビ放送を受信している。地方でも19.8%が家庭用自動車を所持しているが，そのうち33.4%がバイク，2.7%がトラクターを所持している。

一方，都市で生活する若者は，生活の変化が与えている良くない影響を見ることができる。特にマスメディアの影響で，ドラッグの使用や犯罪も増え若者のモラルが低下している。氾濫する情報をどう整理し，判断できるかが，若い世代の人口が多いモンゴルの大きな課題である。

Ⅳ おわりに

今回のモンゴル訪問で実感したことは，同じモンゴル人でありながら都市生活者と草原で暮らす人々では，生活環境が極端に違うということである。首都のウランバートルでは，交通ルールが徹底しておらず道の横断も慎重にしないと跳ねられそうになるほど車が多かった。服装もさほど日本と違いはなく，レストランでも日本にいるような感覚で食事をすることができた。2001年以降3回続けて参加している会員によると，モンゴルはこの4年間に急スピードで近代化しており，それは食事内容やレストランの雰囲気からも強くそのことを実感したと感心していた。一方，草原への道は舗装も不十分で車と出会うことも少なく，排気ガスの都市とは無縁で空気が澄み切っていた。その中で，牧民の素朴さや生活スタイルは自然との共生を強く感じさせるものであった。

モンゴルで過ごした数日は，生活に不可欠な水と紙の不自由さを痛感した。日本は山・河川に恵まれ水が豊富で温泉もある。しかし，モンゴルは年間降水量が少ないこともあって，ウランバートル市内のホテルではシャワーの水が少なく，最初はさび色の水でお湯が40℃に達するのに時間がかかった。流水量が少ないためか，清潔が保たれていないトイレも多く，紙が設置していないトイレも多かった。飲み水はポットに入っているお湯でも飲むと下痢をすると聞かされていたので，歯磨きも飲水もペットボトルの水を使用するなど水の使用に神経を払った。牧民が歓迎の思いを込めて出してくれた夏ならではのチーズやヨーグルト，馬乳酒も健康への用心が先に立ち十分に味わえなかったことは残念であった。日本は紙も贅沢に消費し，店には物が豊富で食べ物にもバリエーションがある。物質的な面においては，いかに日本が豊かで清潔な生活環境であるかを実感した。しかし，モンゴルも国際化が進み，都市や草原で暮らす遊牧民の生活スタイルは変化しており，そのために疾病構造の変化も予想されるが，その変化に医療の進歩が追いついていない状況なども知ることができた。

社会活動としてのボランティア活動では，主に子ども達への支援に力を入れてきたが，今回の訪問は，子ども達の生活の実態に即した的を得た支援であったかを評価する良い機会になった。都市の子ども達は，教育に対する関心と意欲が高く日本への憧れなど海外志向が強かった。本会としては，日本での語学研修の機会をいかに提供できるかが課題である。一方，孤児院

の子ども達には，基本的欲求である生活環境の快適さなど，住居施設の整備面での支援が必要だと感じた。今回，現地に足を踏み入れて実際に見て触れて理解していくことの大切さを実感した。今後は，医療と看護に関する幅広い情報収集も含め，更にモンゴルへの理解を深めて有効な社会活動を進めていきたい。

謝　辞

今回のモンゴル国への訪問に対し，ご理解とご指導をいただいた，藍野大学医療保健学部の矢野正子学部長に感謝申し上げます。

引用文献

1）外務省統計．各国・地域情勢，モンゴル国 http：//www.mofa.go.jp/mofaj/srea/mongolia/data.html〔引用 2004－10－11〕
2）モンゴル歯科協同組合への援助のあり方 http：//wwwjhca.coop/international/mongolia-03.html〔引用 2004－08－04〕
3）山口隆詞：世界国勢図会，財団法人矢野恒太記念会，30－71 頁，460－467 頁，2004
4）モンゴルに医療状況視察団を派遣 http：//wwwjiyuren.or.jp/top/200401－03/040115－mongol.html〔引用 2004－08－04〕
5）吉野八重：モンゴル看護師協会の活動強化に関する支援事業への取り組み．看護 56（6）：80－83，2004